

口蓋裂患者における不正咬合の歯科矯正治療術式に関する研究

大阪大学歯学部 作田 守

昨年度考案した片側性唇顎口蓋裂患者の上歯列弓に対する片側拡大法について、昨年度は1症例への応用にとどまったため、今年度は本法を適応しうるさらに多くの症例に応用して、その有用性を検討した。

1. 破裂側 (lesser segment) のみの側方拡大を行なった症例

症例1 (図1)

4歳11か月女子 拡大期間約3カ月で、良好な拡大成績が得られた。

症例2 (図2)

14歳11か月女子 両側性に拡大後、破裂側犬歯部にのみ cross-bite が残ったため、破裂側のみの拡大を行なった。拡大期間約2カ月で良好な成績が得られた。

2. 非破裂側 (larger segment) のみの側方拡大を行なった症例

症例3 (図3)

14歳0か月女子 両側性に拡大後、破裂側が過拡大されているにもかかわらず、非破裂側に cross-bite が残ったため、非破裂側のみの拡大に本装置を応用した。拡大期間約2カ月で良好な結果が得られた。

症例4 (図4)

8歳6か月女子 初診時において非破裂側にのみ cross-bite が認められたため、本装置を使用したところ、拡大期間2カ月で良好な結果が得られた。 $\frac{D}{D} | \frac{D}{CDE}$ が脱落し、やや拡大前後の状態を比較検討しにくいのが、破裂側にほとんど変化なく非破裂側のみが拡大されている。

前回報告した症例も合わせ、破裂側 (lesser segment) の拡大3症例、非破裂側 (larger segment) 2症例に本装置を応用したところ、限られた症例ではあるが、本装置を用いたすべてに対し有効であることが確認された。

本装置は (図5) に示すごとく、本装置より生ずる力と硬組織に存在する口蓋裂の関係を利用して、いることにその特異性が認められる。すなわち、拡大を要する segment に対しては装置により発揮された力は拡大力として作用するが、その反作用として生ずる後方への力に対しては後方の骨が抵抗源となりうるため、その力による影響を消去することができるという力系にもとづいている。

したがって、本装置は helix の位置、固定歯の部位数を調整するだけで lesser segment, larger segment を問わず、拡大を要する segment のみを選択的に拡大することができる。さらに、製作がきわめて容易である上、患者の苦痛もほとんどなく、比較的短期間に確実な治療効果を上げている。

今後、唇顎口蓋裂患者の歯科矯正治療における上歯列弓の側方拡大という重要なステップにおいて、

広く応用されうるものであろうと思われる。

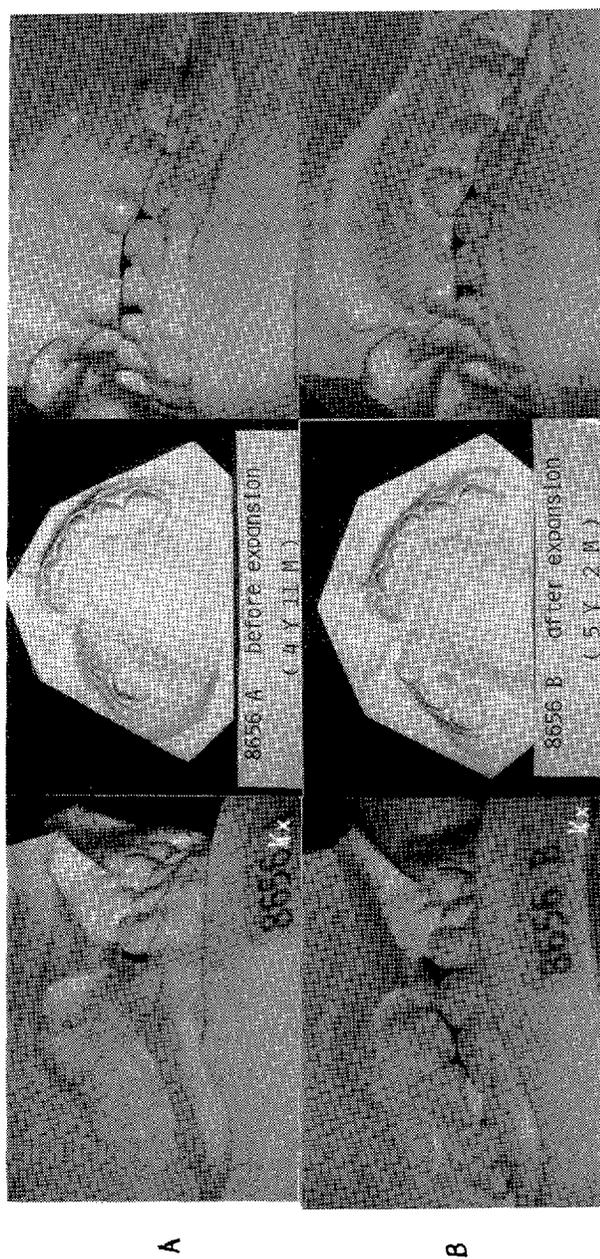
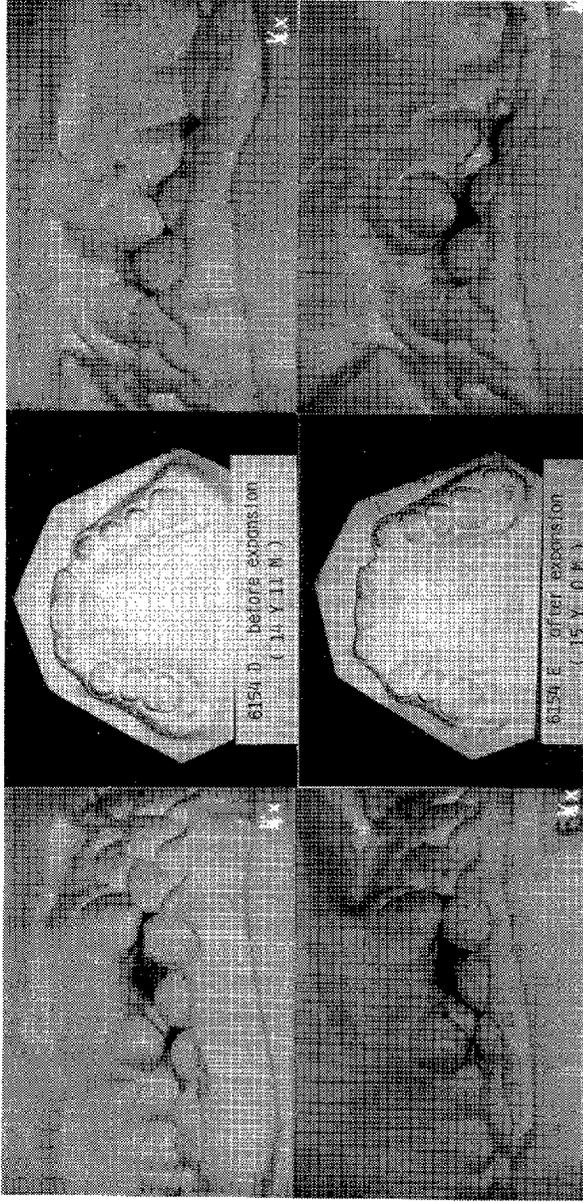


図1 症例1 A:拡大前 B:拡大後



A

B

图2 症例2 A: 拡大前 B: 拡大後

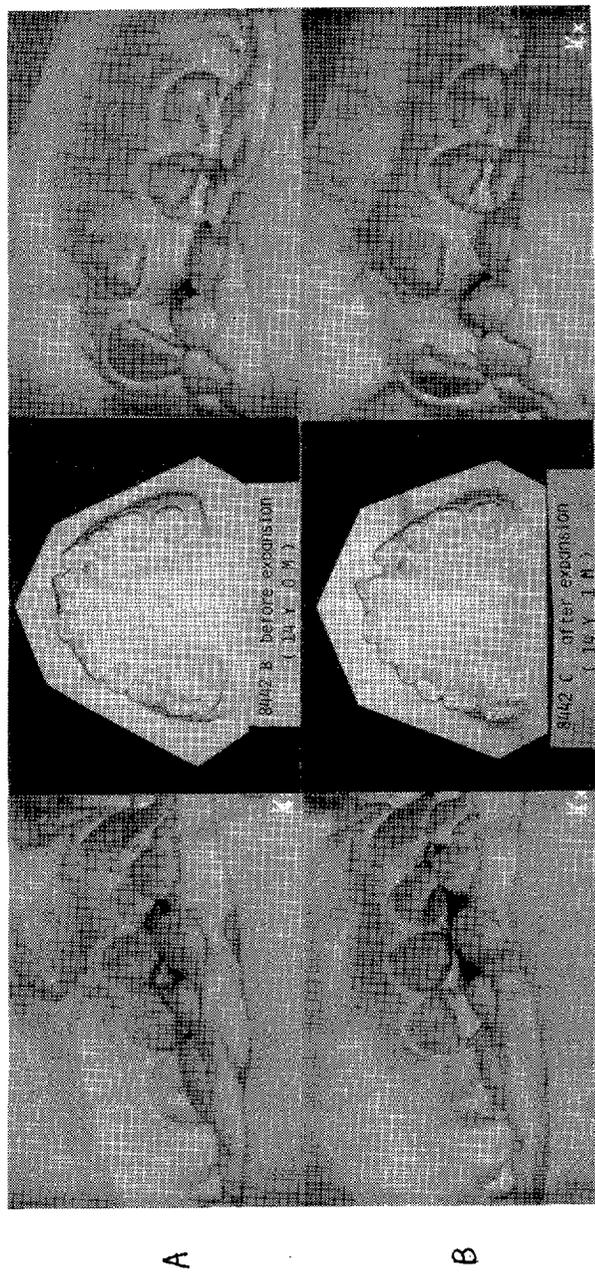
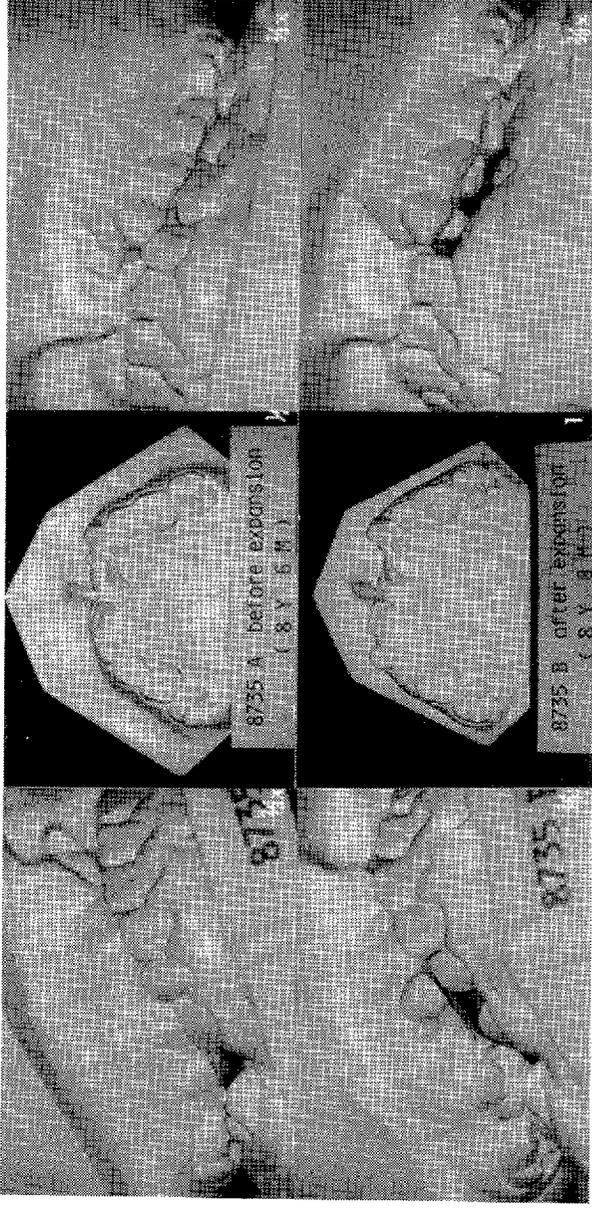


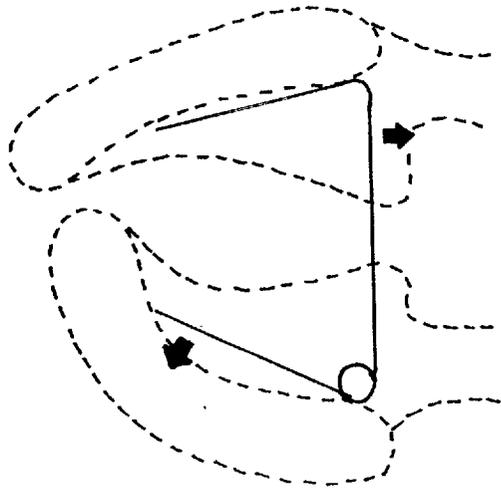
图3 症例3 A: 拡大前 B: 拡大後



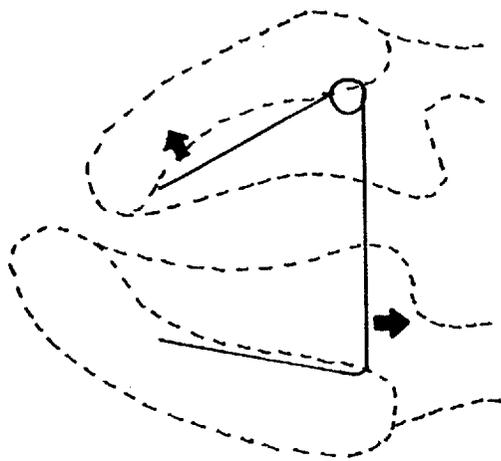
A

B

图 4 症例 4 A : 拡大前 B : 拡大後

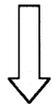


larger segment の拡大

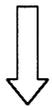


lesser segment の拡大

図 5 裂を有する上顎部構造と本装置との関係



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



昨年度考案した片側性唇顎口蓋裂患者の上歯列弓に対する片側拡大法について,昨年度は1症例への応用にとどまったため,今年度は本法を適応しうるさらに多くの症例に応用して,その有用性を検討した。